

# 姦落の 巫女 姉妹 弐

小説 大熊狸喜

挿絵 和馬村政

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

プロローグ	新たなる淫牙	007
第一章	不動三姉妹 熱肉柱拘束恥罵	012
第二章	不動沙羅 母親退魔師の追憶恥態	061
第三章	四人の女退魔師 肉操相姦淫落	114
第四章	母娘恥地獄 淫魔売春牝肉奉仕	167
第五章	不動一族の終焉 聖力剥奪と完全敗北姦落	193
エピローグ	蛇と退魔母娘	246

## 登場人物紹介

Characters



### 不動七重

三姉妹の三女。母親譲りの強大な力を秘めている、将来有望な退魔師。



### 不動沙羅

最強の退魔師一族「不動家」三姉妹の母。全国退魔師同盟の代表を務める。



### 不動凛

三姉妹の次女。やや粗雑な性格で中性的な肉体派退魔師。



### 不動静音

三姉妹の長女。冷静沈着でカリスマ性を持つ技巧派退魔師。

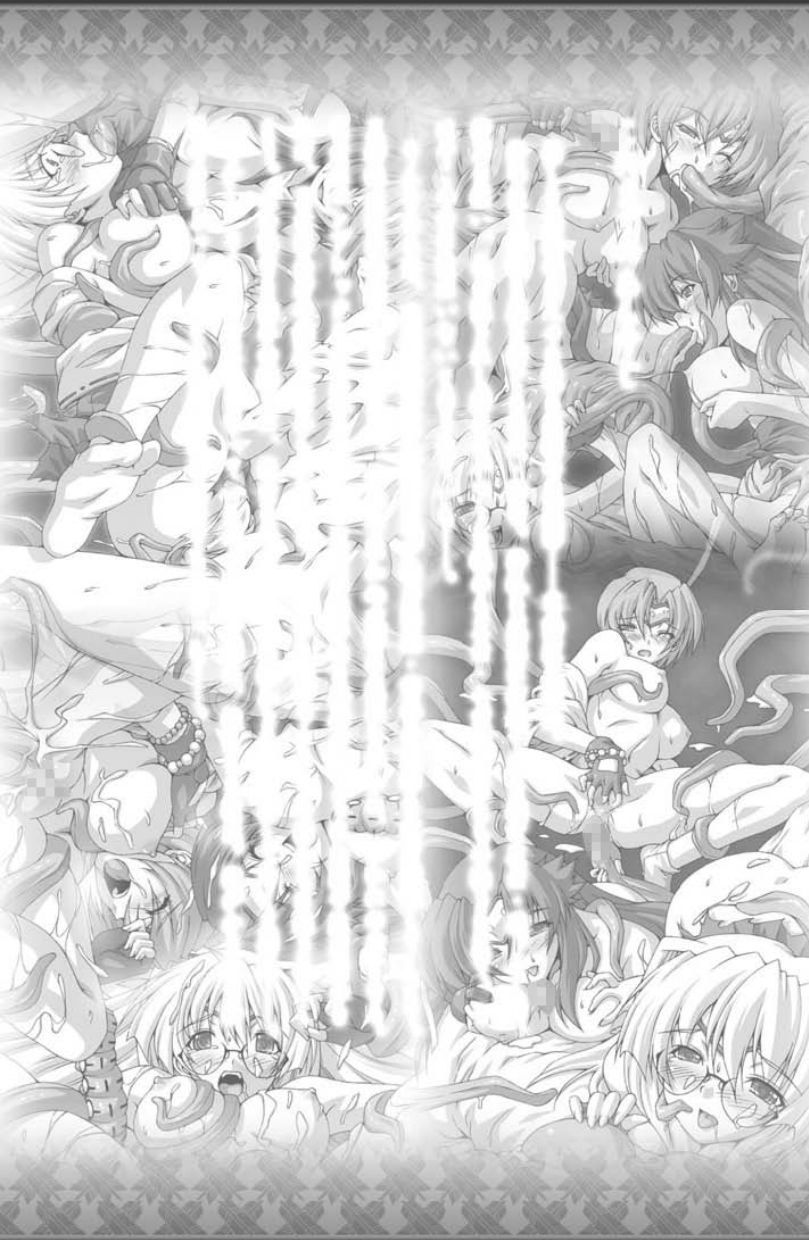


### 紗傲

カミキリムシを巨大化させたような形の醜き淫魔。

### 雅螺我閻

無数の蛇で構成された巨人淫魔。不動家因縁の相手。



揉まれる乳房全体が内側からの熱で熱くさせられて、先端の媚突は布越しの摩擦感で媚弱な甘電を感じさせられている。深い女尻の谷間から女性器全体、処女丘までを熱触手撫でにされると、腰全体に熱媚感が走らされてしまい、下半身全体の力が抜かれてしまいうになる。

粘糸垂れる催淫淫液が巫女装束に染み込まされて、双乳を包むサラシや女性下着が淫液漬けにされてゆく。

「淫液に濡れる巫女……オレの姦肉牝に最も相応しい、淫らな様だ」

「ふん、この程度——あう……ど、どうぞ、沙羅の胸は……ご主人、様の……所有物、ですうふ……くう……っ！」

下司な責めと物言いを余裕の笑みで返そうとするものの、蘇らされた記憶に自身の口を操られてしまう母退魔師。そんな気丈女の従順抵抗をもっと楽しもうと、男淫魔は更に数本の触手を伸ばしてきた。

赤黒い男性器そのものの形と色と太さを持った淫触手は、肉傘の先端でへビのように口を開ける。それはまさしく巨体へビ魔自身の特徴を表したへビ触手だ。

母巫女は退魔衣装の左右裾と正面合わせから淫へビに内部へと侵入をされると、二つの柔乳を包む純白のサラシを強引に引き千切られて奪われた。

プチプチッ、ビッピーイッ！

「——あんっ……そ、そんな乱暴……すてき、ですう……」

両裾と前合わせから、白い布きれを啞えた触手へビが引き戻される。啞え引かれた布が女肌から剥ぎ奪われて、巫女衣装の中で巨爆乳が裸に剥かれてゆく。

(サ、サラシが……奪われる……！)

淫液を受けて敏感にされた弱い脇や背中、下乳や乳肌や先端媚突が、濡れた布地で擦られる。布を失う危機感が直接肉体に教えられてしまい、脳裏は僅かな焦りへと追い上げられてしまう。

締めつけから解放された双乳房は巫女衣装を内側から更に大きく押し上げ、布越しで揉み上げられながら更なる肉質量を見せつけさせられた。淫敵の両手が伸ばされて、巫女服の前合わせが掴まれる。

「グフ……夫にも裸に剥かれ、喜んでいたのか？」

「はい……沙羅のおっぱい……見て、下さ……いい……」

女退魔師の弱々しい返事を、淫魔はニヤリと笑う。

夫との密戯の中で、愛しい男性に両手を縛られて自由を奪われたまま衣服を剥がされる羞恥を、沙羅は夢上に歓喜していた。肉体が覚えている夫婦の秘密を利用される恥辱に、心が怒り震える。それなのに女の肉体は嘗ての性感を思い出させられ、憎き仇に対し従順な女の顔を捧げさせられて抵抗すらできない。

「不動の衣装を剥いで、恥ずかしい乳を剥き出しにしてやろう。どおれ」

——ビチリッブチイツ、ビリリイイツ！

「あああん——は、恥ずかしい…ですう…：…っ！」

巨体怪魔の怪力で純白衣装が引き裂かれ、遂に清楚な未亡人退魔師の双乳房が剥き出しにされた。

(は、春光様以外には、見せた事すらないのに…！)

初めて男淫魔の淫視線に肌を晒された衝撃と羞恥で、母親巫女の脳裏は更に焦燥に駆られてしまう。

布を失うと共に完全解放された沙羅の柔胸脂肪は娘たちの誰よりも大きく、百三センチのIカップバスト。肌色を溶かした雪のように白い乳肌は、三人の娘を産み育てたとは思えない程、重力に負けずに上を向いて綺麗な球体に実っている。それでいて乳房の重さと柔らかさを実感させるように少しだけ上下の楕円を見せてもいて、年齢と実りとが最上の姿で魅惑的に表されていた。

先端の媚突は、乳房に合わせて標準よりもやや大きめで赤く色付いているが、それがかえって清楚で凛々しい大人の母退魔師の中で淫靡に映えている。

上気したツリ目な女顔と、その下で剥き出しにされた頭部以上に大きな乳房。その姿は、大人の巫女女性の中に清楚と淫らさとを併せ持った極上の媚肢体として、完成された媚魅女体そのものだった。

「デカくてイヤらしい、イイ乳だ。オレが楽しむ肉淫女に相應しいぞ」

目的の肉体が予想以上の実りを隠していた事実には、巨体魔へビはイヤらしい笑みで満足

げに笑う。

「イヤらしいなんて……うふ、嬉しいですう……」

(おのれっ、雅螺我闇め……っ！)

女性としての羞恥を晒させられても、心は未だ気丈さを失わない。

布を奪った淫敵の手から新たななへび触手が数本伸ばされると、背後を回られて身体に巻きつかれて、剥き出しにされた両の乳房が脇からの触手に責められる。

生の巨爆乳が根本から先端に向かってへび巻きにされて絞り上げられる。ペニスへび頭先端の口が淫糸を引いて開かれると、更に高さ十ミリ程の赤い乳首が菌のない濡れ熱口で甘噛みにされた。

モミゆるぬゆるぶる、かぶるつくりゆこりユ。

「んん——っ！ この、感覚う……イイン……っ！」

(胸が……淫魔に、触れられて……っ！)

戦闘中の手足以外で初めて淫魔に肌撫でをされて、女退魔師の強気な理性が鳥肌を立てさせられる。へび触手に締められたIカップ双乳は、触手の間から乳肌脂肪をはみ出させられて揉み上げられて、柔らかさを楽しまれるように自由揉み変形をされる。

更に根本まで呑み込まれた乳頭は、男性器の熱を持った濡れ口内で噛まれて転がされて、恥辱愛撫での媚突硬化をさせられてしまう。たっぷりと舐められる乳肌と乳首は容赦なく催淫漬けにされてしまい、肌神経が性神経へと更に敏感媚弱に染められてゆく。





「乳首が堅くなつたか、イヤらしい身体よ」

「だつてえ、んあ……おっぱい、気持ちひ——っ！」

巨爆乳を揉み廻られると、乳房全体から上半身へと熱を帯びた性甘電が伝えられて揺られてしまう。乳首を噛み転がされて軽く潰されると、その度に乳房先端から心臓を通り背筋までが、小さくて鋭い微甘電で一瞬の内に貫かれてしまう。上半身を廻る性感は更にお腹の奥深くで息づく子宮へと伝侵されて、聖宮内では危険な飢餓感が熱風船のように膨らまされてゆく。

(む、胸……お腹が……この、感覚は……っ！)

「ご、ご主人様に、責めていただき——くはう……沙羅のオッパイは……幸せえ……ですう……！」  
甘え口調とは逆に気丈に淫敵を睨む、剥き出し乳房の白麗巫女。しかし身体は本人の意志を無視するように、性感で小さく震えて切なげな腰が僅かにくねられてしまう。

「そうだそうだ。心はもつと気丈に耐えてみせるよ」

そして囚われの娘たちは、媚秘処や濡れ菊肛や柔乳房を弄ばれながら更に触手によって首を固定されて、母親の恥姿から絶対に目を逸らせなくもされていた。

「お、お姉さまっ……このままでは、お母様が——んひゃうん……っ！」

「キショーっガラガ——うふくうっやああんっ……！」

「おのれ……淫魔め——っんくっふうう……！」

何もできず、目の前で母親が陵辱される。それは娘たちにとって決して受け入れる事の

できない、恥辱の光景だ。

獲物女たちの焦燥を楽しむ邪怪魔は、更に自身の淫らな楽しみを進めてゆく。

「今度はオレの沙羅の尻を、じっくりと見てやろうか」

そう言つて笑う雅螺我闇の新たなへび触手が、乳房を嬲られる退魔女性の緋袴へと伸ばされて、腹部の結び目が器用にも解かれてしまう。

淫魔は袴の造りなど、当然のように熟知している。聖なる戦装束は前側の留め紐だけを解かれると、お尻側の布がハラリと大きく捲り下げられてしまった。

「イヤンン…沙羅のお尻…ご覧、下さいい…」

ヒザ立ち姿勢で乳髯りをされる女性退魔師の姿は、正面から見ると大きな変化はないが、後ろから見ると袴を留める紐だけが白い上布の腰に縛られてる。そして純白上布から下半分だけを露出させられた成熟大人の艶女尻が、赤い下着に包まれて覗けていた。

「巫女にしては派手な下着。お前のイヤらしい本性がよく表れているぞ」

「だってえ…沙羅は、ご主人様だけの…子猫…」

（下着を…下着を、見られて…!）

年齢に見合った色の下着は、一見派手だが上品な布で飾り気がなく、組織の代表を務めながらも一人の男性を強く想うという、清楚な内面を見せている。

赤い薄布に包まれた巨尻はたっぷり魅成熟をしていて、まるで絞り出された新鮮なパン生地のような。細い脇腹から大きく豊かに、丸く柔らかく広がりながら、女尻はツンと

上を向いた見事な張りを見せている。

尻肌は乳房と同じく上気した白肌色で、しつとりと汗を浮かせて匂うような女の花香を存分に放っていて、どんなに真面目な男性でも野獣のように下着を剥ぎ取り、背後性交の衝動に駆られてしまうだろう。

神聖な巫女衣装の後ろ布が取り払われた袴から覗く、重さと柔らかさと実った肉の質を充分に感じさせる、母退魔巫女の巨尻。

「いゝ尻だぞお、不動沙羅あ。ますますオレの姦肉として相應しいイイっ！」

その淫靡さを目の前にして、男淫魔は淫喜の邪眼をビカビカと光らせる。淫敵の視姦を初めて艶尻に受けさせられる退魔淑女は、悔しさと羞恥で更に思考が追い詰められながらも、甘い艶声を上げてしまう。

「嬉しい、ですう——はあふあんっ……」

下着を剥き出しにされたお尻がヒザ立ちのまま更に開脚をさせられて、ヘビ触手によって緋袴の上から更に強く、布秘処を撫で廻られ始めた。下着だけではなく袴の生地まで食い込まれるような、強い圧力での布越し割れ目愛撫。

スリスリ、ツシユリイ、スルちゅズルちゅ。

男性器の熱を帯びて勃起筋肉の肉質を持った、催淫液滴るヘビ触手で、女性器の媚構先端から肛門までを何度も何度も熱擦りて往復をされる。女性器の神経が、更に敏感な過敏性神経へと染められてゆく。

「くはあう……あそこう……スリスリい……っ！」

（そ、そこは——触れ、るなあ……！）

布の摩擦感で撫でられると媚肛門が収縮し、肛門と一緒に収縮した膣孔と尿孔が布刺激をされると敏感な肉芽が震えさせられて、更に肉真珠が撫で擦りをされると子宮全体から脳までが、熱い性感針で何度も鋭く貫かれてしまう。

（お、お腹が……この、熱感ん……いけない……っ）

嘗て愛し合った男性との性交で性の快楽を知っている女秘処は、粘膜への淫圧力を敏感に拾わされてしまい、望まぬ恥蜜さえコプリと溢れさせられていた。

乳房への揉み撫で陵辱によって上半身は熱性感で灼かれ、先端媚突への甘噛み転がして心臓から背筋までが鋭い熱性感で貫通される。

上気した頬に汗が伝い、引き締められた瞳は少しずつ熱蕩けで力を失ってゆき、淫魔を祓う退魔巫女が淫魔によって性感に追い詰められてゆく事が、隠しようもなくはつきりと表させられる。

「イヤらしいマ○コが女液をこぼし始めたか」

悩乱を始めた獲物巫女の肉体を更に淫観察で追い詰めようと、袴の前紐を解いた触手が新たな目標に向かって伸ばされた。

「んうん——こ、今度は何を、して下さいますの……」

股間部を触手撫でにされる巫女衣装の中で、女尻を包む下着の両端が触手のへび口で嘯

み掴まされると、腰両側の布地が一気に噛み千切られてしまった。

袴秘部撫で触手の動きに合わせるように生地が引かれて、女の秘処が布撫でにされて下着を奪われる。

しゆるしゆるる、スリユリユっつ！

「ひやつひう……擦れちゃ——っはああああっ！」

催淫液で濡れた布を、擦りつけられるように擦り上げられる。瞬間、閉じられた割れ目の媚粘膜と肉芽を包む包皮とを同時に布擦り刺激をされて、沙羅は声が裏返る程の艶声を上げさせられてしまった。

女の秘処から生まれた強い性電刺激に、背筋から脳までが一瞬で甘通されて、凛々しい眉根が僅かな瞬間だけ、弱々しい女の八字形にされる。

(下着が、奪われた……！)

袴の中で秘処が剥き出しにされて、濡れ緋袴で触手撫でにされる感触を、直接女性器で味わわれる。下着よりも荒い布の刺激は下着を奪われた頼りなさを実感させられてしまい、淫魔の手によって女性の護りをまた一つ奪われた退魔女性は、更なる危機焦燥に追い詰められてゆく。

「肛門を見てやろう。嬉しいか、オレの沙羅よ」

(くうっ……春光様以外に、なんて……っ！)

魔物の淫劣な言葉に、怒りと屈辱で心は震える。それなのに、夫との密戯を思い出させ

られる肉体は、羞恥の服従を告げさせられてしまう。

「どうぞ……ご、ご覧になって……ご主人、様あ……」

お尻を開けられた袴の中では、剥き出しにされた白いお尻が恥ずかしさに震え、首を伸ばして覗き込まれる視姦羞恥責めに耐えていた。

更に後方に突き出させられた女の巨尻は、先端が数本に分裂した細いへび触手に絡まれて、深い尻頬柔肉を大きく左右に広げられてしまう。

きゅむ、むちりい……。

（お、お尻が……広げ、られてえ……っ！）

仇の触手によって、沙羅の肛門が公開された。

母退魔師の媚肛は赤いカフェオレ色に色付いていて、尻の肉質量に比べてとても小さく清楚な印象を与える。数本の細いシワが集まって細い縦長の窄まりを形作っていて、淫魔淫液と自身の恥蜜に濡れて淫靡な艶を纏っていた。

催淫液で神経を過敏にされて、朱艶菊肛は視線を感じて恥ずかしげに収縮をしている。夫以外の者に肛門を見られるという恥辱で、理性が急速に羞恥熱蒸しにされて、思考が鈍らされてゆく。

濡れた秘唇は細へび触手の押さえる袴によって殆ど隠されているが、僅かに覗ける割れ目後端からは微量の恥蜜が艶を見せていた。被うべき魔物に女尻を剥き出しにされて、熱を感じさせられる程の間近で淫観察をされる。

「お前の生女尻、尻の穴までよく見えるぞ。尻の穴、までなあ、グフッフフン」

「ひんん…沙羅わは…うく——嬉しひ、ですう…」

（が、雅螺我闇…などにい…っ！）

理性は今にも怒りと恥辱で爆発しそうなのに、肉体は愛する夫に辱められた喜びを思い出させられて溺れさせられ、プルプルと震えてただ歡喜する。

「淫魔に肛門を見られて歡喜するとは…不動の女、沙羅とはトンだ変態女よ」

「はい…沙羅は…イヤらしい、ペットお…」

肛門視姦責めの羞恥で心臓の鼓動が早められて、更に息が乱されてゆく。

「今度はお前が夫にしていた、イヤらしい奉仕をしてもらおうか」

空気を求めて閉じられなくされた肛門視姦退魔師の口許に、仇淫魔の熱臭い生殖器が突きつけられた。

「は、はい…ご奉仕、させて…いただきます…」

（奉仕…く、唇で…）

淫敵のペニスで頬を撫でられると、顔が穢される汚辱感で心に鳥肌が立てられる。しかし、男性器の熱に触れさせられる肉体は頬に感じる熱と、焼けた鉄と尿を濃縮したような男性器の匂いに鼻腔を突かれた途端、女の役目を思い出させられて奉仕の姿勢を見せていた。性熱に沸く女体の視線が、淫魔の勃起男性器を捕らえさせられる。

（…こ…こんな、モノを…っ！）



雅螺我闇のペニスは酒の瓶ほどに大きく、起立して赤黒い肉色に淫水灼けをしていた。

本体はやや横に太い楕円形の円柱状で、筋肉を想像させる肉質感は力強い反り返りで天を向いている。表面は太細多数の血管で雑な起伏を持ち、全ての血管は熱脈を打っていた。

先端の肉傘は大きく発達し開ききり赤子の肌のように艶を持ちながら、無数の陵辱を誇るような黒光りをしている。鈴割れは口のようにパクパクと左右開閉をしながら、透明な男汁を淫らに垂れ伸ばしていた。

「久しい……男性の……た、遅しい——はひゃん……」

触手揉みで舐められるIカップ双乳が左右からたつぷりと揉み寄せられて、左右の乳首で仇の勃起を挟まされる。乳首と乳輪肌に男性器の熱と重さと質感を感じさせられると、女の肉体は自身の意志を無視して、教えられた唇奉仕を始めさせられた。

「失礼……致します……ちゅっちゅ、ペロン……」

艶めく唇で先端肉割れに口づけをして、赤い濡舌で龟头部を突っついて舐める。淫魔汁が舌に触れるとニガ不味い塩卵白にも似た嗚咽の味で口内を満たされてしまい、更に鼻腔を抜けて脳までが汚染されてしまう錯覚さえさせられる。

眉根が八の字に下げられて、瞳からキツさが失わされて、自身の乳首で挟まされた淫魔勃起との恥辱舌舐め口づけを、何度も繰り返させられる。

「美味そうにしゃぶる、いい顔だなあ。不動沙羅は母親であり退魔師でありながら、淫魔の勃起を喜んで味わう、まさしく変態マゾ女だな。グッフフン」

「は、はい……ちゅっちゅ……沙羅は、恥ずかひい……ペロ、れろる……マロオンラ、れふ……ちゅうう」

敵の罵りに反論もできず、唇は更に黒光りする肉傘を舐め呑み込みで、口内亀頭愛撫をしてゆく。肉棒先端を内頬で撫で、肉傘裏を唇で締め擦りながら、舌を使って本体裏側を舐め愛撫する。

「んくんく、ちゅうむ……やつぱり、おいひい……」

（臭くて、熱い……しかし、耐えなければ……）

久しく触れる男性器の匂いと熱弾力に、女の意識が灼かれてしまう。目的の女体に唇奉仕をさせた男淫魔は、更に女体を楽しもうと再び触手を伸ばしてきた。

袴越しに秘唇を撫でる濡れ淫触手に離れられると、催淫液を含んで女性器に張りついた濡れ袴が後ろから掴まれて、秘すべき媚粘膜からゆっくりと袴布が剥がされ始める。

突き出させられたお尻で感じる濡れ布剥がしの感触に、女性器が剥き出しにされる瞬間が休む事なく教えられて、意識が更に恥焦燥をさせられてゆく。

「次はマ○コを見てやるぞ。グッフン」

「ああん、見へえん……レロちゅっ、んくんぷ……」

（み、見られる……っ！）

ペメリ、めちり……。

肛門付近の布が剥がされ股間中心部が晒されて、割れ目の先端から処女丘までが隠し布

を奪われる。これまで夫以外の者には見せた事のない経験割れ目が、汚れた淫怪の視線に晒させられてしまう。

更に細へビ触手が左右の柔肉に充てられると、柔媚肉までもが両開きにされて、遂に沙羅の秘粘膜までもが完全公開をされてしまった。

「くんん……アソコが——んちゅっちゅっ……っ！」

沙羅の恥丘には頭髮と同じく、赤い細柔恥毛が生えている。秘毛は綺麗に整えられていて、真面目で清楚な母の性格をよく表していた。

先端で包皮から顔を覗かせる恥肉芽は、久しく触れていない外気と光を受けて、小さく恥ずかしげに媚震している。左右に広がる媚肉花弁はやや厚みを持っていて、細かくて複雑なシワを持つ赤い蜜艶の秘粘膜と共に、大人の女としての官能秘処姿を見せていた。

（が、雅螺我闇……などにい……っ！）

「見られへえん……あん……感ひまふう、きゅむちゅ……」

小さな尿孔と後ろで息づく肛門は視姦の羞恥で収縮を繰り返し、更に一際赤い濡れ腔孔は三人の子供を産んだとは思えない程、キュッと強く閉じられている。その姿は愛する男性との性交を純粹な喜びとして甘受してきた、素直で愛らしい女の、まるで一輪の華を咲かせたような開花濡れ秘唇だった。

へビ淫魔は触手先端のへビ眼でも物が見えるらしく、開かれた秘唇を視姦しながら淫らかな感想を吐く。

「これがオレの沙羅の、オレが犯して楽しむマ○コだなあ。色艶も形もイヤらしくて、まさにオレ好きなマ○コだぞお」

「あふ——んぱ……そんな、うれしい……ご主じ——あふ……コヒユヒン、ハファ……んく、んむん……」

柔らかい肉をかき分けられて、局部完全公開という恥辱にくねられる女の成熟巨尻。濡れた女体の淫靡な柔悩乱に興奮を高められたのか、濡れる口内では勃起先端の肉割れが射精に向かつてプクリと口を拡げ始めた。

そして男性器の変化を鈴割れに差し込んだ舌先で探る沙羅は、勝機の瞬間が近付いている事を実感する。

（！ 待っていたこの時……もう少し……！）

「んん……ペロちゅれる……アフくてカタくて、オイヒイ……れふう……んくつぶくつ……ちゅうむ……っ！」

ちゅルぷムユつぶユくつ、れるぺりゅつちゅうう。

憎き仇を敗北の地獄に叩き落とそうと、夫亡き人妻退魔師は更に唇奉仕と舌愛撫の締めつけ舐めを強めてゆく。

「マ○コを見られて興奮したか、いい淫ら様だな、オレの沙羅よ。褒美をくれてやるか」  
熱男根がヒクリッと一瞬震え、淫魔褒美である射精の瞬間が目の前に迫る。奉仕の女は密かに必殺の退魔力を集中させて、射出の機会を窺う。

濡れた舌をより深く先端肉割れに差し込み、淫仇に対し更なる性奉仕で女口唇の性快感を与えると、淫魔勃起本体がビクリと射精の蠢動で震えた。

(今こそっ！ 退魔力を——ああっ！)

決死の退魔力を射出しようとした次の瞬間、白麗退魔師の目の前に、再び夫の勾玉が掲げられた。仇の勃起根本に露出された勾玉。これでは力を打ち込んだとしてもすぐに淫魔力に変換されて、敵に吸収されてしまう。強い焦りに囚われた獲物妻に向かって、巨体怪異はニヤついた。

「お前の残り少ない退魔力。オレ様がわざと残してやった事に気が付かなかったか？ グッフン」

「んん——!?」

(な——何……っ!?)

焦燥して見上げる獲物淑女と、勝ち誇った邪笑みで見下ろすへび怪魔。退魔力を残していたのは沙羅の力ではなく、淫魔の淫畏だったのだ。

「僅かに力を残してやれば、その力に縋って反撃の機会など決まってくる……それは射精の瞬間だ。だからオレは安心して、お前に奉仕させる事ができたのだ」

(——っ!?)

全てはこの魔へびの淫略通りだった。雅螺我闇の奸計に沙羅の思考が乱されてゆき、凜々しい表情ははつきりとした焦りの色を、隠せなくされる。

「そしてオレは追い詰められたお前の、更に淫らな恥態を楽しむ事ができる。最強の不動家女退魔師、不動沙羅が、全ての恥孔から自らの恥液と共に退魔力を排出させられる、恥辱の性絶頂をなあっ」

(そ、そのようなっ…あなたの、自由になど——！)

「はひいっ……ご、ご主人様の、するままにい……っ！」

淫邪に笑う男淫魔。淫罵に墮とされた母退魔師は自らの失態に苦渋を吞まされ、更に全ての戦闘手段を失った事実にも強く動揺をさせられてしまう。仇へびの嘲笑にすら何一つ抗えず、囚われの退魔未亡人は遂に全退魔力排出への肉責め陵辱に晒され始めた。

「んぶっ——んぶむうっ…奥、ノ口おくふう…っ！」

これまで硬化乳首で挟まされて唇奉仕させられていた勃起本体を、喉奥にまで押し込められて口内強姦をされる。へび触手の口に甘噛みされていた朱硬化乳首が、へび舌に巻かれて舐め転がされて味わわれる。

百三センチの巨爆乳を根本から触手巻きで揉み廻られて、皮膚薄い敏感な白い腋を淫液ヌメルへび触手で撫で愛撫をされる。

くぶヂュぶズユっぶ、もミゆたぶヌるちゅっ。

「ひあんむっ……んぷう——んっんっ……おっオッパ——ホップアイっワキヒっ、ヒモキひいひい……っ！」

更に袴を解かれて下着を奪われ、限界まで無理矢理開脚をさせられると、数本の細へび

触手で媚肉開きに公開される女の濡れ秘処は、濡れた淫舌によって熱愛撫をされ始めた。

ちゅルペチよむるチュ、ツぷゆとプちゅぶル。

細触手に包皮を根本まで剥かれて完全露出をさせられた充血肉芽は、糸のような極細のへび舌に根本まで巻きつかれる。絞られながら擦られながら、催淫液漬けにされて更なる過敏性感帯に染められる。

「あつ、アヒヨコつ……ナメ——ひいいんっ！」

薄い花卉と蜜濡れ粘膜は余す処なくへび舌に舐め回されて、恥蜜を味わわれながら淫魔の淫液を塗り込められてゆく。小さな尿孔は膣孔と共に、左右に引き上げられて更に媚弱な内側粘膜を捲り出されて、催淫液を滴らせるへび舌によって舐め廻られながら媚孔の神経を性神経へと染め変えられてしまう。

そして柔肉押し開きによって強制的に晒される女巨尻。その中心で息づく朱カフェオレ色の人妻媚肛は、催淫液でヌル濡れるへび触手の先端を強い力で押し充てられて、肛姦の危機に晒された。

「つくひゃふああつ…オヒリっ、もつと押しっ——んぐんぐつ……もつとおひてええ——あぐぶう…っ！」

首輪の肉操によって両腕を背後に回されて、開脚立ヒザの姿勢で拘束される女退魔師の肉体が、へび淫魔の肉触手で好き勝手に操られて媚体廻りにされる。

催淫液を肌塗り込められて神経を性神経に染め変えられて、更に体内に残された僅か

な力が淫液に浸食をされて変質させられてゆく。

(た、退魔力が…身体が…肉感で、侵されて……!)

細い顎を捕られて開口させられて、憎い淫敵と視線を絡まされながら口内陵辱をされる、屈辱の目線捧げイラマチオ。

くちゅっぶヂュぶムっ、くぶグぶつぶむちゅっ。

筋肉までも支配された顎は噛みつく事もできず、魔勃起に歯が触れないよう大きく開口させられたまま、唇強姦を受け入れさせられる。熱牡肉で擦られる口内粘膜が汚れた男汁を塗り込められて、口腔いっぱい満たされる牡の性臭が鼻腔に浸透し脳にまで染み込まれてゆく。

愛する男性の肉体は隅々までもが愛おしく感じられる女の理性にとって、嫌悪する魔牡の性臭など嘔吐感を刺激される毒腐臭以外の何ものでもない。

それなのに。

(臭くて、苦い…のに……ああ、おいしい……っ!)

犯される口内は男性器の持つ熱と堅さと重さの存在感をズッシリと味わわされて、唇から粘膜、舌や喉奥の神経までもが不思議な充足感で満たされてしまう。

愛する夫以上の性快感をくれる存在が、夫の命を奪ったこの淫魔であると、妻女体に教え込まれてゆく。

「あぶっんっ——もつと…ペろ、ちゅぶむ…っ!」



勃起本体で塗りつけられる透明な男汁の臭さと苦さに、舌が痺れる。男性にしか味わわせてもらえない強い男根弾力だけで、口内全体から脳までもが勃起責めにされて思考力が奪われてしまい、女の意志も自尊心も、自ら屈服へと跪かされてしまいそうになる。

「これが褒美だ、排水淫液をやろう。呑むがいい」

口内勃起からは精液ではなく、透明淫液が放出された。唾液と混ぜられた退魔力排水の魔力が淫熱に灼かれた喉によって、コクリコクリと溜飲させられてゆく。

(だ、だめ……呑み込ん、では……)

「あい……んく、んく……ああ、いい匂いひ……っ」

ニガ臭い汚臭で喉から鼻腔、脳までが灼かれると更に肉体は淫熱責めに狂わされてしまう。後ろ手拘束で反らされた半裸の女上体は、Iカップ双乳を捧げ見せるように突き出させられていて、触手の乳揉み陵辱に晒され続ける。

モみゆりもりゆむ、たぶぷりユぬゆぷり、こりゆコロリゆくりゆ。

胸部肌から乳首根本の乳輪までの乳房全体が触手巻きにされて、根本から先端に向かってヌル絞られるように揉み上げられて嬲られる。触手肉間からたっぷりとはみ出る左右巨爆乳の柔脂肪は、それぞれが柔らかい曲線で変形をさせられながら、上気した白い肌色と淫液に濡れた艶を魅せつけさせられて、女体だけが持つ淫靡さまでをも存分に發揮させられていた。

勃起の熱を帯びる触手で乳房柔肉がこね揉み上げられると、乳房の肌が焦れたい性刺

激で痺れさせられる。乳脂肪は揉み圧力で神経を淫刺激されてしまい、内部から持たされた熱と撫でられる敏感腋からの性刺激で、上半身全ての神経が淫熱感染させられてゆく。

先端で硬化する朱桃色媚突からは、熱舌に絡まれて甘噛みで転がされる度に鋭い媚電が生まれさせられて、心臓から背筋を抜けて脳と子宮までもが性媚甘電でズチツチと刺し貫かれる。

後ろを解かれた緋袴は、下着を奪われお尻を突き出させられて、内腿と巨尻の柔肌が触手廻りで催淫液を塗り込められながら、女性器廻りの恥陵辱を味わわされていた。

「んぷっはむぷっ——ひお、ひおんなっ：ヒオコ口をほ……もっつつ、ナデてへ：あはあんん……」

ぬりユとぶつペトぬゆる、つぶちゅつぶちゅつ、むちりつきユちユツプむつ。

柔肉分けに拡げられた尻頬肉や腿は、触手の熱肌サスリによる催淫液責めで性神経を開発されていて、男性器そのものの熱い触手弾力で撫でられただけで肌も神経も、女性器までもが甘電させられる。

濡れ舐められる媚粘膜や舌巻きにされて絞られる濡れ肉芽は催淫液と強い性感の相乗効果を受けさせられて、達する寸前の男性器のように断続的な痙攣を起こさせられていた。更に肉巻きにされたクリトリスからは針のように鋭い性刺激が次々と発信させられて、性熱に喘ぐ子宮が更なる淫刺激で飢餓感責めにされる。

横に拡げられた尿孔は粘液ヌメるへビ舌によって奥深くの膀胱にまで催淫液を塗り込め



られて、排泄器官そのものまでもが性神経へと染め変えられてゆく。

(お、奥……膀胱お……そんな、処までえ……！)

狭い膣孔は菊肛と共に横一文字にまで引かれ変形させられて、二つの女孔は左右からのへび舌によって淫液塗り舐めに嬲られていた。女性にとって最も過敏な媚孔と最も恥ずかしい排泄孔とが、敏感すぎる性感帯へと染め慣らされゆく。

舐め責められる敏感膣孔からの性甘電で聖宮が媚電責めにされて、溢れさせられた熱恥蜜が狭い膣壁からトロリとこぼれる。ヒクつく女肛はへび舌のヌル感覚で収縮を繰り返させられて奥深くに向かつて淫液浸透させられて、腸壁までが性神経染めにされてしまう。

「おオヒリいつ……もつとナメナメひてええ……っ！」

肌からの撫で性刺激と女性器への舐め舐りによって肉体が淫熱染めに開発されてゆき、甘電に貫かれる子宮では飢餓熱の風船が容赦なく膨らまされてゆく。

淫魔の性感を甘受する肉体に脳神経が熱蒸しにされ思考力が押し潰されて、恥辱と羞恥で理性が追い詰められてしまう。

性感で痺れさせられる肉体からは容赦なく力が抜かされてゆき、恥辱の淫弄びをただただ甘受する事しかできなくされる。淫熱で体温が上げられて女の肢体は汗を吹き、息が乱れて瞳が蕩け、視界がぼやけて脳裏には白い霞が掛けられる。

淫液嬲りにされる女肉体が望まぬ性の絶頂へと、一方的に叩き上げられてゆく。

そして体内ではつきりと淫浸食をされてゆく、唯一の切り札である退魔力。

「んぶふうっ——あぶっ、こんらっ感りまふう——はむぶっ……このままあっ——んぐむうんんっ……！」

（こ、このままでは……退魔力が……春光様の、仇も……娘たちを、助ける事も……っ！）

夫の命を奪った憎い淫敵に跪かされ、肉体を隅々まで嬲られながら口奉仕をさせられている、凜々しき未亡人退魔師。そして目的の女体に淫奉仕をさせる満足感に、男淫魔は罵りの言葉を浴びせながら更なる羞恥へと陥れる。

「悔しいか、しかしいい様だぞ、不動沙羅よ。ではいよいよお前の退魔力を全て排出させて奪い取り、羞恥の敗北を味わわせてやる」

白麗の半裸退魔巫女の肉体が、勃起を口に含まされたまま触手によって持ち上げられて、更に強姦唇を軸にされて舐められる肢体を仰向けにされる。

背後で両腕を拘束する触手に支えられた身体は、限界開脚の爪先立ちでヒザを折られ、女体前面を天井に向けたまま顎を反らせて肉棒奉仕をさせられるという、清楚な巫女女性には決して有り得ないような淫猥の姿勢に再拘束された。

「ふんん——こんふお……はば……このようなかっこ——んぐうっ、うっうれひい、れふう……っ！」

更に緋袴を触手に千切り奪われると、下半身は完全露出をさせられる。上向きにされて隠しようのない開脚半裸姿にされた女退魔師の濡れ肉体。舐められる性感で追い詰められる意識と自我が、不安定な拘束により更に焦燥へと追い詰められてゆく。

尊敬する母の晒される羞恥に、囚われ肉体嬲りの娘たちは敵魔への怒りを露わにする。

「おっお母様あ——うはううっ…っ！」

「キシヨ…っ、これ以上母様をお…は辱めるなあ…っ！」

「グッフフウン。濡れ肌で追い詰められる女の悲鳴とは、何とも聞き心地の良い音色であるものか」

娘たちの絶叫を最上の艶声と感じる汚れた怪へびは、獲物女を敗北淫墮の入口へと立たせる為、更に肉体責めを加速させる。

「オレの手でいきながら退魔力を排出させて、羞恥の敗北を味わうがいい」

「はい——はいっ……サラ、ヒきたいい…っ！」

触手群は一気に嬲り責めを強めてきた。沙羅の肉体は敗北への性絶頂へと、更に加速をさせられ始める。

ぐゅムっぶユぢゆるゆぢユぶっ、ムみゆるゝたふるコロむユもみゅっ、つぶちゅむユるめちゅっ、く二むにペロちゅうっ！

口内抽送に、巨爆乳房揉み陵辱に、硬化媚突甘噛み転がしに、全身の肌嬲りに、後孔舌嬲りに、濡れ秘唇へのへび舌舐め淫愛に、成熟人妻巫女女体の全性神経が激性感を与えられて魔快樂で灼き上げられてゆく。

「んぐゅふううううっ——んふゃっ、殿ガっ…トロカタのうっ…熱ひいっ——胸ええっ、お尻ひっ……あくっはぐううっ、ステキい——んぐんくう…っ！」

巨大な黒勃起に視界を占領されて、焼けた鉄のような熱で肌を焦らされ、臭い牡臭を嗅がされる。それだけで少女たちの子宮が飢餓感に責められて、更に脳はジワリと痺れて、思考力が否応なく停滞させられてしまった。

「どうした？ 舐め味わっても良いのだぞ」

(な、なめ——なめる……)

怪異の命令に心臓が跳ね、瞳がトロリと蕩けさせられる。そして——。

「だ……だれが……れる……」

「こんな……ちゅぷ、ちゅっ……」

「ああん……ぼつきさまあ……ちゅうん……」

退魔師母娘は抵抗意志とは裏腹に、自ら唇を捧げ濡れた舌を這わせていた。

「はふん、んちゅ、ぺ口……ああ、あついい……ぺろ、ぺへろ……」

近付けた顔が焼かれそうな程、熱いペニス。濡れた舌で舐め味わうと、熱に加えて匂いと舌触りで刺激をされて、子宮の奥がキュウ……と掴まれたように切なくされる。顔から受ける脈打つ性熱で頭がぼやけ、子宮も脳も同時に焦らされ熱を上げさせられてゆく。

(こんな、こと……していたら……)

サラリとしたペニス本体の表皮が舌に気持ちよく、鼓動打つ血管に舌神経が溶かされてしまう。息が乱れて恥汗が浮いて、艶めく唇からは透明な涎が垂れ伸びていた。

憎き仇淫魔に対し、躡けられた牝犬の如き従順に舌舐め奉仕をする、退魔一族、不動家

の母娘。上気する頬と頰が、女体の性感服従をはつきりと表している。

周りでは言葉も話せない下級兵たちが、巨大男性器の元でヒザをつく半裸女退魔師たちの恥辱姿に、蔑むような邪声を上げていた。

ギュシヤジュジュギヤアア、ギャツギュギヤツ！

(ま、まわりから…しせんが…)

まるで淫魔相手の見せ物にでもされてしまったかのような屈辱感。しかし一方で、どこまでも墮とされてゆく惨めさに肉体が一方的に慣らされてゆく。恥ずかしい姿を見られ蔑まされる事実にさえ、子宮と脳が熱飢餓感で責められて痺れさせられてしまう。

獲物女たちの牝犬恥態を楽しむ男怪異は、巨大勃起の根本から更に数本の触手ペニスを伸ばすと、女退魔師の肉体に絡め始めた。標準の太さを持った無数の熱ペニス触手が淫液を滴らせながら、性熱浮かされる女体に足下から巻きついてゆく。

又るちゅル、つるちゅルぬチュるペトちゅルる。

「あんふつ——しょ、しょくしゅが…：…んレロ、あぶちゅ…：…つ！」

「く、くるなう…：…ちゅう、んぶんちゅ…」

開脚正座の脚が腿と一緒に巻きつけられて、更に開脚させられてしまう。細いお腹が触手に捕られて、お尻を突き出す姿勢にさせられる。無防備な秘処と肛門を突き出させられると、媚尻から濡れ身をくねり出した双頭ペニスに、自身の尿孔を突き刺された。

つんつツプんつ、又むるちゅ、つぶつぶりゅ…：…つ。





「ひっひい——あ、あそこ……さわっちゃ——ひゃんん……ひ……っ！」

恥蜜に濡れる媚尿口を微弱な圧力で勃起押しされてしまうと、膣孔が焦らされて子宮が強い飢餓感で支配されてしまう。目の前が眩しい白光の連続で灼かれて下半身が力なく前後させられて、肌が桜色に上気させられる魘られ退魔少女たち。

更に上体は触手に巻かれて反らされて、乳房を突き出す姿勢にされる。揺れる四人の乳房が左右から指触手に持ち上げられると、深い谷間がペニス触手にムッチュリと占領されてしまった。

「んんんっ——あつくてえ……ドクドクつてえ……」

ペニスの熱と脈動に胸が打たれ、女たちの鼓動が更に速められてゆく。勃起触手を挟まされた双乳は更に細い紐触手に左右の乳房を纏めて絡まれ、勃起から乳肌が絶対に離れないよう拘束されてしまった。谷間を占領した触手ペニスが上下の抽送を開始する。

っしゅるむりゅチュったぶムチュふるムりゅッっ！

「むつムネひゃめれええっ——ひぎいっくふふ……ホパイ……とけひゃふのっ……っ！」

更に両腕を持ち上げられると、それぞれの掌でペニス触手を掴まされた。その途端まるで条件反射のように、退魔の女たちは熱堅い敵の勃起に対して、無意識に優しいサスリ奉仕を施してしまう。

スリシユスリ、スリスリ……。

「て、てえ……ポッキがトクトク……ミヤクふって……きもひい……くふんん……っ！」

(こんな、ことが……かんじるふ……)

開脚で無防備にされた秘処をペニス觸りて突きこねられて、肛門を犯されながら腰を前後し、乳房と両手でペニスへの肉体奉仕をさせられる退魔の母娘。息が乱れて瞳が彷徨い、突きつけられる淫邪な牝肉に対し、ただ素直に女体奉仕を捧げていた。

「舌が留守になっているぞ、この淫売母娘」

「……あ、あい……ペロちゅ……」

淫魔の吐くあきらかな侮蔑の言葉すら意識できず、女退魔師たちは更に丹念な舌奉仕へと没頭させられてしまう。溢れる唾液を舌に乗せて、勃起表面を舌いっばいに舐め愛撫する。表皮に触れる鼻先には、ペニス先端から溢れる苦い粘液がネトついて糸を引き、女たちの媚顔が精液汚れで穢されてゆく。

ペニス汗を溶かした唾液を満遍なく舐め取ると、無意識に舌が味わってしまい、喉を通して胃の中へと溜飲してゆく。勃起に舌奉仕をする母娘の顔はお互いの頬が触れるほど近く、密かな息や艶声がそれぞれの耳を刺激し合って、更に女の肉性感が高められてしまう。

「ポッキひやま——ペろるちゅ……おい、ひい………はふん……ペろぺちゅ……」

(からだ……せつない……なめるの……いいい……)

胸の先端や肉芽、膣孔や子宮などの、最も飢餓感を覚えさせられる媚処は全く触れられず、それ以外の性感帯を舐め廻られる焦れたい性感責め。焦らされる女体は一際高い男性熱に触れる舌感覚をより強く敏感にさせられていて、勃起奉仕をする濡れ舌から子宮や

脳へと、蕩けるような性感を送らされてしまっている。

男淫魔の奸計通り、いつしか退魔の母娘は誰ともなく瞳を蕩けさせて、恥辱の舌愛撫奉仕に恥服従させられていた。

「四人もいるのだ、少しは頭を使ってそれぞれ別の場所を奉仕しろ、間抜け女どもめが」  
「レロあうん……すみまふえん……ひんま、さまあ……」

蔑まされた言葉を投げつけられているのに、怒りも悔しさも奉仕性感の中に一瞬で蕩かされ消されてゆく。退魔母娘は無意識に、お互いの場所を目の端で捕らえながら、舌愛撫する場所を変え始めた。

静音と凜はヒジをついた四つん這いになり、両手でペニス触手を撫で愛撫しながら、自分たちの頭程もある睾丸を片方ずつ舌舐めをする。開脚正座のままの沙羅は自身の巨爆乳をペニスに擦りつけながら、肉傘裏側の敏感箇所を舌を這わせる。そして七重はヒザ立ちになって背筋を伸ばして、勃起先端の肉割れに赤い舌を差し込んだ。

ぺろぺちゅろりゅ、スリすしゅりレロ、ちろちろつぷちゆる。

「んふん——へんらあじい……れも……ぺろぺろ、ちゅくん……」

末妹の頭よりも大きな龟头は赤黒く淫水灼けをしていて、咽せるような性熱と牡臭を放っている。肉割れからこぼれる汚液が鼻腔に臭く、舌に不味い。それなのに舐めれば舐めるほど舌が蕩けて脳が痺れ、熱浮き濡れる胎内では飢餓の風船が膨張させられ、更に性感を求めて牡ニガ汁を溜飲させられてしまう。

自ら場所を変えて連携し、淫魔に対して性奉仕をする不動母娘。その淫らな姿に、取り囲む怪下級兵たちは自分たちの勃起を振り立てて、先走り汁を散らしていた。

奉仕性感に女体が支配されてゆくのが止められない。それは少女の下で奉仕を捧げる母や姉たちも同じだった。

「ここをうめると……ヒクってひまふ……うふふ……れろレロん」

夫に教えてもらった男性器の敏感箇所を舐めながら、快感反応の喜びに女体本能が歪んだ満足感で満たされてゆく妻退魔師。

「きひ——き……たまあ……ちゆう、ぷちゆう……くひゃひ、のにい……」

「ここ……れろ、ぺろれ……だんせひの……じゃくてん……なめるの……レロ」

責任感の強い長女は、自ら男性性器の俗名を口にするという不品行に、強い羞恥で身を震わせる。強気な次女は敵の弱点要所を舌愛撫させられる恥屈辱に、どうしようもない被虐の性感を覚えさせられている。

もはや不動の退魔母娘の脳は、仇淫魔の性感箇所に対し自ら肉体での愛撫を捧げる程にまで、性感を灼き上げられていた。

「母娘強姦に淫魔売春。これが最強と謳われた不動の女退魔師か、グッフファアンン」

「ちがひ、ま……こんら——はああ……レロ、ちゆうチュぶ……」

言葉だけの弱々しい抵抗が、舌奉仕へと消えてゆく。服従愛撫に怪異のペニスがブクリと一段太さと熱を増すと、女たちは肉体で覚えさせられた男性の絶頂を予感させられた。

「れ、れるう……セーシ、れてくる……ちゅうう、ペロペちゅ」

臭い精液を吐きつけられる。その汚辱感に残された理性は恐怖し、しかし女体はそれ以上の期待感で更に舌愛撫を強く施す。

「んんあう——くらすひ……ちゅっちゅ……ひんまはまろ、セーエキい……んちゅちゅう」

静音の唇が寧丸を吸い、凜の前歯が表皮を優しく甘噛みする。沙羅の上唇と舌が肉傘裏を挟み舐め上げ、七重の舌が鈴割れの中を舐め往復で愛撫した。

ちゅうちゅっ、かぷプニ、又ゆるりりちゅっ、くぷルちゅっプるゆむ。

肉体の飢餓感に責められるまま、退魔の母娘は貪るように舌を捧げる。双頭ペニスで尿孔を舐められ秘処が恥蜜をこぼし、犯される媚肛は腸液を溢れさせる。揉み上げられる乳房がタプタフと揺れて、双乳奉仕で柔変形をさせられる。乳房谷間もペニス触手を撫でる両の掌も、先走り液を垂れ流されて牡臭の粘糸を引いて艶光る。

「てえ、ムネへえ……んちゅ、ちゅう……ぬる……ヌルルひてえっ——んん……きもひ、いい……！」

舌を通して焦らされていた子宮の飢餓風船が限界まで膨らまされると、もう不動の母娘には精液を頂く事以外、何も解らなくさせられていた。目の前の巨大勃起が更に一段、熱と太さと赤みを増す。

「あはぐうっ——も、もふう……ほひ、いいい……っ！」

(ほ、ほしいっ……せい、えき……せいえき、ほしいい……っ！)

女の飢餓感を責められる退魔師たちは、ヘビ怪異によって更に貶められてゆく。

「どこから出る精液が欲しいのなあ？ はつきり言わんと解らんなあ」

淫語を言わされるといふ屈辱に塵理性が抵抗をした——その次の一瞬で、退魔師たちの恥辱は女の飢餓感に呑み込まれてしまっていた。僅か一瞬もない戸惑いを置いて、退魔の母が、三姉妹が、自ら淫語を口にする。

「ぺ、ペニ——ペニスさまあつ、レロ……ヒンマろお、おお……おチンポさまあ……」

「きんた——きんたまつさまあ……ほしひいつ……ちゅうう……」

「ぼっ……きひ——ぼつきつ、ポッキマラああああ……あぐうう……っ！」

上気しながら辜丸の俗名を叫ぶ、理性的だった筈の静音、勇ましかった凜。そして。

「おひ……ひんん……ペロレロウ——おちんちんさまあつ……ちゅっちゅうう——んぱ……おちんちんさまのつ、セーエキい……くらさひいっ——レロる、ちゅぷちゅう……」

生真面目だった眼鏡少女は、快樂の足下に屈しながら淫猥な哀願する。飢餓感の膨張で理性が追い詰められた女退魔師たちは、敵怪異の命ずるまま、堰を切ったように俗語を連呼していた。

「よくも恥ずかしげもなく口にするものよ、恥知らずな女退魔師どもめ」

「はひい……ララへは、くちゅぺろ……ホチンチンらいひゆき……んく、んちゅ……なのれちゅう……っ！」

蕩けた瞳で卑猥な言葉を発しながら、巨大な勃起に舌愛撫を捧げる退魔師母娘。惨めな







「ああああ……ひまんさまあ……セーエキ、いばいい……」

眼鏡や赤髪、双乳房やお尻の上で白濁の珠が弾けて溢れ、少女の肢体が牡性臭漬けに穢される。顔や肌を覆う牡液の熱や匂いや粘感触で、七重たちは更に数回の軽い絶頂を味わされた。胸の谷間や掌の中でもペニス触手が白濁を吐いて、退魔師母娘の肢体を穢す。

「い、ヒっちゃっ——んくうっ……はあ……ヒクヒクって、イツひゃ——っはんん……」

しかし軽い絶頂は飢餓感の解消には全く繋がらず、僅かな性感を与えられた子宮では逆に飢餓風船がより大きく膨張をさせられてしまい、女たちはこれまで以上に強く塵理性を責められる焦燥に晒されていた。

「また……しきゅふ、が……っ！」

「からだ……くはうう……っ！」

更なる飢餓感で女体が責められると、それだけで全身の力が抜けさせられてしまう。そして飢餓に喘ぐ女退魔師たちを、巨体怪異は淫邪に笑った。

「ほうら、女を犯したい淫魔兵どもが、お前たちの身体を待っているぞう」

「え——ああ……っ！」

雅蝶我闇の言葉に視線を向けると、母娘の周りには再び陵辱魔兵が集まり始めている。

——チャリ、チャリリ……。

下級怪異たちからは小銭の音が無数に聞こえ、それは更なる淫魔売春をさせられるという、淫惨な予言だった。

「い、いや……もう……っ！」

抵抗する身体には力が入らず、不動の女退魔師たちは下級兵に手足を捕られ、残された巫女衣装を奪われ裸に剥かれながら、売春陵辱の渦中へと引きずり出されてゆく。

「こ、こひつっ——はなせへっ……いひやだああ……っ！」

「おねえさ——きやあああっ！」

仰向けや四つん這いに捕らえられた女たちの女孔に、買春淫兵たちの勃起が次々と突き込まれ始めた。黒髪長女の唇が、眼鏡妹の濡れ菊肛が、母退魔師と次女の膣孔が、下級怪異たちによって再び肉孔として買われてゆく。

——つくぷつぷつ、ムチリゆムきゆうつ、つぶぢゆうぷつ！

「ひはあああああつ——んはんっ……いっ、いっばいいいいつ——サラあ、かわれておかされてええっ……いイつちやふうううぐう……っ！」

そして飢餓性感で責められた女体を勃起詰めにされた途端、退魔師としての使命感も女としての意志も自我も尊厳も、満たされる肉感で消失させられてゆく不動の母娘。

「はひいっいいいっ——ば、ばひしゅ……ナナへえ、ばいひゅんっ——らひ、ひゆきひいいいっ……！」

雅蝶我闇の言葉で、溶かされてゆく理性が更に絶望を刻みつけられる。

「この買春が終わったら、蕩けた肉体で再び奉仕をさせてやろう。そして更に飢餓する肉体を買われ犯され、また奉仕をする……グッフフフン」

(まだ……かわれて、おかされて……)

蕩けた瞳には、売春強姦で淫歡喜する母たちの姿と、これから自分たちを買うであろう無数の魔兵たちが映る。しかも今自分を犯しているのは、さつき母を買った淫怪異。

「いやっいやあつ……はああつはきゅふうつ——も、もつとふかくうつ……ナナへをおかひ——あぶんんつ……んちゅ、んくんく……」

(このまま、じゃあ……くる……ちやふう……)

自分を犯した怪異が母を買い、そして母を買った淫魔兵に買われ犯される。いつ果てるとも知れない売春と肉奉仕の陵辱淫獄の底で、退魔師母娘の艶声が恥絶望の淫響を上げ続けていた——。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**